

IV-489

都市景観計画に関する比較研究

岩手大学 正会員 安藤 昭
 岩手大学 正会員 赤谷 隆一
 岩手大学 学生員 ○佐々木貴弘

1. はじめに

今日、都市景観に対する認識が高まるにつれ、全国のあらゆる都市において都市景観施策の展開が顕著となっているが、その指針となる都市景観計画の実態についてはこれまで明確に示されてはいない。本研究は全国42都市の都市景観計画を都市景観計画の理論に基づき比較研究することによって、その実態を実証的に示すことを目的としたものである。（調査都市：表-1参照）

2. 都市景観統合理論からみた各都市の景観計画

都市景観を概念的に捉えと、それは固定した視点と対象によって成立する透視形態と、その総和を契機にして形成される都市のイメージという、より包括的な2つの景観現象に大別することが出来る。前者は都市景観のミクロスケールである対象視点の景観表現を扱うのに対し、後者はマクロスケールである都市の骨格構造を取り扱う。この都市景観のカテゴリーに人間の脳機能の左右差を科学的基礎とした「半球モデル」を交差させることによって表-2が導きだされる（都市景観統合理論：安藤 昭 1990）。以下、各都市の都市景観計画をこの原理に基づき分析するものとする。

●都市記憶素材の採集 都市記憶素材（edge, path, node, district, landmark）の採集は、都市の骨格を把握するとともに景観対象となるべき要素、すなわち景観資源の抽出にもつながる重要な作業である。この作業において岐阜市では、観光資源や観光コース・ハイキングコース・観光行事等の抽出による調査から、長崎市では歌謡に現れた詩句や直接来街者に対する調査から客観的都市像を検討しているが、これは、岐阜市や長崎市では観光と結びついた都市を指向しており、来街者に対するイメージ向上も課題として掲げていることによる。また、弘前市や福井市では伝説や民話、歌碑、記念碑、町名の変遷といった民族資料により歴史的な都市像の発掘に努め、豊橋市においては、心象風景の調査として市内の小中学校の校歌の中で唱われている山・川・海などの自然情景に着目している。

以上、特徴的な調査例を挙げてみたが、一般に都市記憶素材採集作業は、より客観的な手法としてメンタルマップ法などによる市民に対するイメージ調査が望ましく、その補助的作業として歴史的・民族的資料や観光的資料などによる調査との併用が考えられる。しかし、各都市におけるその作業は曖昧なものが多く、市民に対する調査がみられた都市はわずか10都市にすぎなかったのに対し、調査手法が不明確な都市がおおよそ半数の20都市にのぼった。景観資源が計画の根底をなすものである以上その採集方法と内容には十分な配慮が必要であり、計画書に明記する必要がある。

●都市コンテクストの編集 都市記憶素材は相互に関連し補完し合うことによって複合体として都市の文脈（コンテクスト）を形成している。この認識があつて初めて個々の景観表現計画へと移れるものであり、そのためにも描きだす都市構造は、都市コンテクストとして包括的に編集されなければならない。採集された都市記憶素材を解釈・編集し、意味を与えることによって、①景観の類型化、②都市骨格構造の編集作業がなされ、全体の略画的都市像が描きだされる。そして、さらに③象徴的言葉を与えることによって都市景観のテーマが設定され、計画の方向性ができあがるのである。①は体系的に整理することによって概ね図-1のように表され、②は実体論的空間概念と実存的空間概念を導入して考えることによって表-3のように表される。②の作業においては、帯広市など4都市で造型形式であるグリッドパターン構造がみられた他は

表-1 調査都市と景観条例施行状況

人口（人） （平成4年3月31日現在）	10万	10万— 30万	30万— 50万	50万— 100万	100万— —	合 計
調 査 都 市	氷見 日田 掛川 九尾 津山 米沢	小樽 帯広 鎌倉 松本 福井 明石 盛岡 宮崎 弘前 秋田	那覇 高知 高松 豊橋 長野 奈良 旭川 岐阜 倉敷 金沢 長崎 姫路 静岡 新潟	鹿児島 浜松 岡山 熊本 堺 千葉 仙台 北九州	広島 福岡 神戸 名古屋	
計	6	10	14	7	5	42
景観条例施行都市	1	6	11	3	4	25
景観条例検討都市	3	3	3	3	0	12

表-2 都市景観統合理論

カテゴリー	左 脳 (ロゴスの)	右 脳 (パトスの)
骨格構造 (マクロ)	II目標：脈絡 課題：都市コンテクストの編集(総合)	I目標：わかりやすさ 課題：都市記憶素材の採集(分析)
景観表現 (ミクロ)	III目標：個性 課題：場所の個性表現(分析)	IV目標：修景 課題：美しさや生活感の演出(総合)

ほとんどの都市において山水景形式が取り入れられていた。これは日本の都市の多くが、その形成過程において地理的・地形的条件の影響を受け、自然発展的なものが多いことの表れといえる。一方で、骨格構造の編集作業が見られなかった都市も13都市あるが、都市全体の景観バランスを崩さないためにも、都市を構造的に解析し、編集する必要がある。

③の作業についての代表的な例としては「杜の都」の都市イメージの継承と育成を計画の柱としている仙台市や、「劇場都市」を都市イメージとして掲げている小樽市が挙げられるが、このように空間に言葉を与える創造的行為は客観的視点からの議論を可能なものとし、あるいは法制化の実現へとつながるものとして、重要な役割を持つものである。

●場所の個性表現 この作業は、全体との調和を考慮しながら場所の個性を表現するものである。一つの都市においてもその対象地は数多く存在するため各都市におけるその手法を特定することはできないが、代表的な例として計画方針などからその手法を分類すると、次のような傾向がみられる。

緑や水、あるいは地形といった自然を生かした手法を用いている都市が29都市と最も多く見られたが、これは近年のエコロジー指向を反映したものと考えられる。また、代表的景観を生かしている例として、姫路城や熊本城のように城郭の眺望を生かした計画を行なっている都市が12都市、盛岡市における岩手山のように地理的シンボルを生かしている例が12都市あり、アイデンティティ創出手段の一つとしてこの手法が数多く用いられているといえよう。しかし前述の通り都市のイメージという精神現象に対する認識が弱いため、これらの計画が局所的なものとなってしまう、個性を引き出すつもりが逆に個性を潰しかねずパターン化してしまう恐れがある。都市イメージと景観表現方法の結びつきについては、今後の計画における重要な課題といえる。

●美しさと生活感の演出 都市景観計画において要請される最終課題は要所の景観表現の修景であり、それは図-1における「構成要素」の洗練であり「構成要因」との調和である。視覚的課題のみならず、触角あるいは聴覚的課題をも考慮し、生活感とやすらぎを演出することによって人間感性への働きかけが行なわれる。最も多くみられた計画は、街路樹、あるいはポケットパークを設けることによる緑化事業で、既に都市形態が確立している中、より手ごろに自然を取り入れられるものとして、この手法が数多く用いられているものと考えられる。また、修景作業が主観に偏らないように市民に対する景観意識調査を行なっている都市も多く、特に広島市においては「都市美診断調査」として要所の景観をSD法などにより評価してもらうことによって、景観「構成要素」に対する解析を行なっており、以後の計画の指標としている。特徴的な例として、旭川市の積雪時の景観に対する「雪景観」としての配慮や、奈良市など25都市でみられた、ライトアップなどによる「夜間景観」への配慮が挙げられる。春・夏・秋・冬、朝・昼・夜といった視点より各者の景観の差異を比較し、いかに結びつけるか、あるいは対比させるかが、年間を通しての景観計画のポイントと言えよう。

3. おわりに

今回調査した42都市において、景観条例を施行していた都市、あるいは景観条例の施行を検討していた都市は合わせて37都市にのぼった。これは、実に全体の9割近くに当たる（表-1）。本来都市景観とはその土地の生活感情の表れであり文化の象徴でもあるので、条例による景観形成は好ましいものとはいえない。しかし、多くの都市において条例の施行や検討がなされ、中でも中小都市においてその傾向が強いことは、情緒的思考による景観形成推進の限界を表したものと考えられ、現在における都市景観形成の現実を表したもののといえよう。

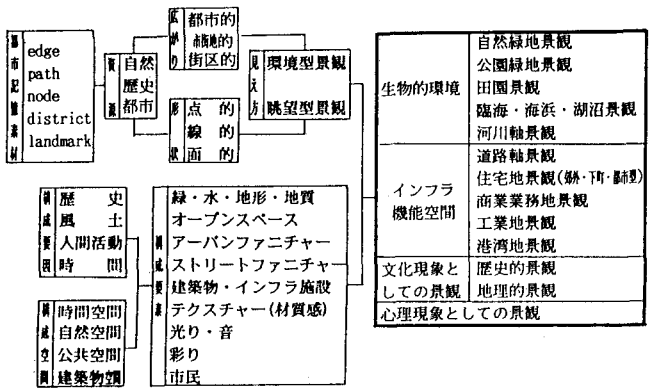


図-1 景観の類型化

表-3 骨格構造編集方法

編集方法	技法	代表例
造型形式	パターン方式 (ゾナパターン等)	ロサンゼルス(アメリカ)
	幾何学式	ヴェルサイユ(フランス)
自由形式	風景式	ウエルウィン(イギリス)
山水景形式	イメージモデル	盛岡(日本)